

## 絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『ねずみさんのおかいもの』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

平田凜・穴見暖花・小島明日香  
桑野琴巳・下川ほのか・田中那歩  
富田紗衣・原田涼・水谷弥晴

題材とした絵本：『ねずみさんのおかいもの』

文：多田ヒロシ  
出版：こぐま社



タイトル：「ねずみさんのおかいもの」

実践準備の担当：プロデューサー（小島明日香）、衣装（水谷弥晴）  
小道具（水谷弥晴・富田紗衣）、音楽（田中那歩）  
記録・報告書（下川ほのか・桑野琴巳）、脚本（平田凜）

実践時の担当：母ねずみ（小島明日香）  
子ねずみ（穴見暖花・桑野琴巳・下川ほのか・田中那歩・富田紗衣・原田涼・水谷弥晴）  
ナレーション（平田凜・小島明日香）、音・演奏（田中那歩）  
カメラ・音響（平田凜）

### 1. 題材「ねずみさんのおかいもの」選定の理由

この絵本を題材として選んだ理由は以下の3つである。

一つ目は、お買い物という普段の生活の一部であることが、子どもたちが題材を聞いた時にイメージがしやすいのではないかと考えたことと、イメージができることで絵本の世界観に入り込みやすいのではないかと考えたから。

二つ目は、子ねずみたちが協力をしながらお買い物をするので、子どもたちも参加しながら協力をすることを経験できるのではないかと考えたから。

三つ目は、主人公が一人など限定された数ではなかったため、子どもたちも私たちもみんなが平等に参加することができることと、買う物の種類を変えたり増やしたりすることで一人一人に役割が出来ると考えたから。

(穴見暖花)

## 2.絵本の世界から遊びへの展開

絵本から遊びの展開について6点にまとめて考えました。

1つ目がねずみのお母さんからの手紙をもらったというシーン。お母さんから手紙をもらいお買い物に行くと言う流れをすることによって自分たちは今からねずみさんのお手伝いをするねずみになるのだという展開に繋がった。

2つ目が一緒にお買い物に行く場面。何をかうのかまず母ねずみが伝えておき、そこからどの食材をかうのかを一緒に選んでいくところに繋がった。

3つ目は野菜をちぎる場面。折り紙を使って野菜を切るような遊びをした。料理をするというごっこ遊びへ繋がった。

4つ目は火の表現方法の部分。火を表現するにあたってまず火加減に注目した。強かったり弱かったりを表現するには身体を使おうと考えた。そして自分が火になってチャーハンという火をたくさん使う料理に合わせて強火を表現した。

5つ目は料理を食べるシーン。保育園の方には実物が何もなかったのだが、先生から声かえをしていただき、見立てて食べるようにした。見立て遊びにつなげました。

6つ目が絵本の世界から戻る場面。ネズミの被り物を被ってもらったのだが、最後のナレーションの部分でそのねずみの被り物を外すことを行い絵本の世界との区切りをつけた。

(原田涼)

## 3.実践に際して大切にしたこと

実践に際して大切にすることを、以下の3つに分けて報告する。

### ①子どもたちと一緒に楽しむ

私たちと同じように子どもたちにも同じ空間にいるような気持ちになってもらえるよう、まず『ネズミの耳を付ける』という工夫を行った。私たちと同じネズミの耳をつけることで、物語への興味やワクワク感を得られたのではないかと思った。

### ②身体表現を大切にする

ネズミたちとチャーハンを一緒に作るシーンで、どうやったら子どもたちも参加できるか考えた結果、身体表現で火を加熱させるために、身体全体を使って火になりきるという身体表現を行った。実際に行ってみると、子ども一人一人表現の仕方が違う事に気づき子どもたちも楽しんで火になりきっていた。

### ③一緒に考える

スーパーのシーンなどでは、私たちが一方的に進めるのではなく、子どもたちにスーパーの場所を教えてもらったり、どの野菜やお肉をかう予定だったかを子どもたちに問いかけ、教えてもらいながら、お買い物をするという工夫を行った。一緒に考えるには、まず声掛けが大切だと思ったため、子どもたちへの声掛けを意識しながら行った。一緒に考えることで、子どもたちも私たちと一緒にスーパーに行っているような気分になれたのではないかと思う。

(桑野琴巳)

## 4.内容について

### (1) 全体の構成

全体の構成を以下の①から⑦の流れで行った。

#### ①子どもたちへのあいさつと導入

ナレーターが子どもたちに呼びかける。導入として「いっぴきのねずみ」の手遊びを子どもたちと一緒に楽しむ。その後、話の前段階として、「母ねずみから手紙がとどいた」と呼びかけ、内容に繋げていく。手紙を読んだ後、子どもたちにねずみに変身してねずみさんたちに会いにいこう、声かけをする。その際、保育者にも手伝ってもらいながら子どもたちの様子を見て進める。

#### ②母ねずみから子ねずみにおつかいのお願い

ペープサートの母ねずみが登場し、子ねずみたちにおつかいとして買って来て欲しいものを伝える。子ねずみ達が復唱することで見ている子ども達にも内容がしっかり伝わるよう心がける。

#### ③お買い物

コーナーごとに買い物を進める。実際に歩いて移動していると伝わるように、カメラを移動させながら話を進める。それぞれの店では事前に伝えられていたもの以外の野菜や卵の大きさ、肉も用意しておき、子どもたちと一緒にどれを買わなければいけなかったかを尋ね、子ども達と対話をしながら進めていく。卵の場面ではどれかを選ぶだけでなく、恐竜の卵であったり、ひよこが入っていたりと面白さ、楽しさを工夫として取り入れる。また、卵を選ぶ際に「何か聞こえるよ」と呼びかけ、ピアノを用いて恐竜やひよこの鳴き声を表現し、繰り返すことによってわくわく感を引き出す。

#### ④帰宅し、その後チャーハン作りを手伝う

買ってきたものを母ねずみに伝える。そして、チャーハン作りを手伝いたいと伝える。母ねずみと一緒にチャーハン作りを行なっていく。

#### ⑤キッチンにてチャーハン作りを行う

##### 1)野菜を切る

事前に用意していた野菜の形に切った折り紙を保育園に送っておき、子どもたちも一緒に野菜を切る(ちぎる)体験を行う。子どもたちに手元が見えるようにして、どのようにちぎるかを伝える。これによって、子どもたちに、ゴールがみえるようにする。また、楽器を用いて終わりが近くなったら音の速さを速くすることで聴覚にも伝わるよう工夫する。切った野菜をボウルに入れるように伝える。子どもたちが切り終えたら保育者がボウルを短大に持っていきような動作をし、その後私たちが実際に受け取ったように見せる。

##### 2)炒める

子どもたちから受け取った野菜と卵をフライパンに入れ、炒めていく。この場面の時に、火が点くよう子どもたちに身体表現で「火がつくようにパワーを送って」と呼びかける。その際に子ねずみが動作を一緒に行い、子どもたちにどのように動くと良いか見せる。実際に火がついた後も、子どもたちの姿を見ながら火の大きさを表現する。火がついている時はプラスチックの袋や折り紙を用いて火の音を表現する。

## ⑥完成

出来上がったチャーハンを子ねずみたちが食べる。「美味しいね」など、食べることの楽しさや嬉しさが伝わるような声かけをする。

## ⑦まとめ

ナレーターが出てきて、ねずみさんたちのお手伝いをしてくれた子どもたちに感謝の言葉を伝える。最後にはねずみたちも出てきて一緒に伝える。

(小島明日香)

## (2) 子どもたちとの対話について

【オープクエスチョン】自由に回答してもらう質問

### ◎場面

〈買い物のシーン〉

- 「野菜コーナーはどこかな」と辺りを見渡しながらいかける  
→「うしろ」と答えてくれる。
- なかなか買う食材が分からず「どれ?」と問いかける  
→色や方向を教えてくれる。

### ◎感想

オープクエスチョンのような対話では子どもたちが自由に発言していた。そのため右や左の方向で答えるのではなく、指で方向を教えてくれたり、画面越しに「あっち!これ!」と伝えてくれる姿が見えた。このことから子どもたちの言葉の発達を学ぶことができた。

【クローズドクエスチョン】選択肢のある質問

### ◎場面

〈はじめ〉

- 「ねずみさんになってくれるかな」と言う問いかけ  
→「いいよ」と答える

〈買い物のシーン〉

- 事前に準備していた食材の中から食材を選んで、母ネズミに頼まれた食材で当たっているのかを問いかける  
→電波の問題で声が聞こえづらいとき○や×といったジェスチャーを用いて答えてくれる

### ◎感想

対話の多くでクローズドクエスチョンの対話を用いて、スムーズに会話を進めていくことができた。また、選択肢のある質問だと回答する子どもたちは答えやすいだろうという意図で対話を進めていった。

【まとめ】

子どもたちとの対話の中では子どもたちに伝わりやすいようにジェスチャーや簡潔な言葉を用いるように心掛けた。また子供たちの発言した言葉に耳を傾け反応して応答的な流れを作ることで、子どもたちの意見が物語に取り入れられているような楽しさを感じてもらえるようにした。

(下川ほのか)

### (3) 表現の工夫

私たちのグループでは、使用する道具や製作物が多かった為、リーダーを決め、指示や意見をみんなで話し合いながら進めていった。子ども達が物語の中に入り込めるような様々な工夫を行った。

まず子どもたちがネズミに変身できるようにネズミ耳を作って園に送ったり、野菜をちぎるシーンでは先生から私達に受け渡しがあったかのように、カメラの中と外を使った演出するなど子どもたちが楽しく、ワクワクできるようなことを考えた。さらに、同じカメラ位置でも、背景に布を貼って別の場所にいるように見せたり、別画角の時に裏で次の演出の片付けや準備をしたり、スーパーでは買い物に応じてカメラの位置を移動していた為、スムーズに移動するにはどうするべきかをみんなで話し合い、練習しながら修正していった。また何か問題が起きて場合でも、その都度みんなで話し合い、意見を出し合っていた為、みんなの工夫と意見とアイデアが沢山詰まった演出なり、とても素敵な作品を作ることができた。

(田中那歩)

### (4)音と音楽

移動の場面での音楽を入れた。スーパーまで行くシーンなので、弾むような音で絵と照らし合わせながらピアノで演奏した。また、卵を買うシーンでは恐竜とひよこが出てくるシーンで3回を意識した音でだんだん強くした。そうすると、リモートで声が届きにくい中だったのだが、卵に注目して何が出てくるのだろうかと思わせることができた。そのほかでも野菜をちぎるシーンでウッドブロックを使い集中を促したり、楽しいリズムの中でできるように工夫した。さらに、野菜のちぎり終わる時間が合間にならないように「もうすぐだよ!」という声かけの後から楽器も早く打つようにした。そうするともう終わりなのだという雰囲気にすることができた。アクションが起きる際に音を入れると子どもたちも絵本の内容により入っていると感じた。

(原田涼)

### (5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教こども劇場は、12月1日(木)の午後に行われた。子どもたちには実際にねずみの被り物を付けてもらい、物語の世界に入り込みやすいようにした。実際にその時の子どもたちの様子は、買い物をする内容など、画面越しに教えてくれ、「○○だよ、それじゃないよ」と積極的に参加してくれていた。これから3つに分けて省察を行っていく。

#### ①お買い物をする時

お買い物をしていく時には、演者からの問いかけに楽しそうに答えてくれた。しかし、子どもたちが楽しそうに答えてくれたこともあり、子どもたちに対する私たちの声掛けが届きにくいときもあった。そこで、お買い物する内容を選んでいく時に、手を使って○か×かを表せるように初めから指示をしておく、スムーズに進められたのではないかと思った。

卵を選びに行く時には子どもたちに対しての問いかけが少なく、選んだ卵から恐竜がでてきても子どもの反応も少なく感じた。そこで、ピアノの音がなると同時に子どもたちに対して「なにか聞こえないかな?」と興味を引き立たせるような声掛けをすると良かったと反省をした。

## ②料理を作る時

料理を作る時には子ども達にも実際に野菜を切ってもらえるようにした。しかし、子どもたちが折り紙を破いていく時に演者側がただ声を掛けるしかなく、切り終わる区切りもつけることが出来なかった。なので、ここでは打楽器を使ってる間は折り紙を破くようにし、終わる時には楽器を早く打って終わりの合図が分かるように工夫をするようにすると良いなと思った。

火を炊く場面では、火になりきるという事に子どもたちは最初は戸惑いがあった。しかし、徐々に火になりきる姿が見られ、子どもたちが動くぶん、火が大きくなって行ったため、楽しそうに行っていた。ここでは、演者側が火になりきっている姿をお手本として子どもたちに見せると、分かりやすかったのではないかと思った。

## ③できたご飯を食べる時

できたご飯を食べる時には、子どもたちがただ見てるだけになってしまったため、物語の展開を子どもたちにも実感出来るようにはどうしたらよいかを考えた。考えた結果、子どもたちにも「食べてみてみようか！」や、「美味しいね！」などの共感の声掛けをしていくことがよいのではないかと思った。

(水谷弥晴)

## (6) 取り組む過程での改善と工夫

今回『ねずみさんのおかいもの』という絵本から物語を作るにあたって、改善と工夫したところを以下の項目に分けて報告する。

### ①物語の内容について

物語の内容は脚本担当を中心とし、全員で考えた。脚本が完成すると全員で読み合わせをし、セリフ確認。セリフの言い回しや物語の動きを丁寧にみていき、意見を出し合った。また実際に練習していく中で、子どもたちが見て分かりやすく、参加して楽しんでもらえるようにするには、どうしたらいいかを考え、以下の表のように工夫・改善した。

当初の計画	工夫・改善したこと
こねずみたちのお手伝いを母ねずみが出てきて紹介する。	ナレーションが、母ねずみから手紙を読む。
最初にこねずみ達が登場するところで、立って喋っている。	こねずみたちが「だるまさんがころんだ」をする。
料理を作る場面で、こねずみ達が作っているのを参加している子どもたちが応援する。	子どもたちが料理を炒める火に変身する。身体表現をして参加する。

このように物語の内容を工夫・改善することで、子どもたちが物語に入り込んで、絵本の世界を楽しむことができたり、身体表現を行うことで子どもたちの様々な表現を引き出すことができるようにした。

## ②小道具について

小道具は担当者を中心とし、妥協せず細かいところ一つ一つまでこだわり製作した。また練習などを行っているなかで、以下の表のように工夫・改善し、まとめた。

当初の計画	工夫・改善したこと
子どもたちが変身に使うねずみの耳をホッチキスで止めていた。	子どもたちが変身に使うねずみの耳をホッチキスで止めた。その部分をテープで止めた。
恐竜の卵が倒れていた。	恐竜の卵が倒れてこないように後ろに針金と段ボールで補強した。
恐竜の卵とひよこの卵は持ちにくかった。	卵に段ボールで持ち手を付け、持ちやすいようにした。
ペープサートで母ねずみを作った。	ペープサートのサイズが大きかったため、余分な部分を切った。
恐竜の卵が割れる時に手が見えていた。	手で揺らしているのが、見えないようにした。

このように工夫・改善することで、子どもたちが怪我せず、安全に道具を使用することができたり、画面越しでもどうしたら小道具が大きく、はっきりと見えるようになるかを再度考え、製作した。

## ③音・演奏について

音・演奏は担当者が中心となり作った。また練習などを行っているなかで、下記の表のように工夫・改善し、本番に臨んだ。

当初の計画	工夫・改善したこと
野菜を一緒にちぎる場面で子どもたちが取り組んでいるのを応援する。	オーケストラ・ウッドブロックを使用し、音に合わせて一緒にちぎる。また音を止めることでちぎる作業が終わったことを理解できるようにした。
恐竜の卵とひよこの卵の演奏は一回のみ。	演奏を三回に増やす。

チャーハンを炒める音を紙をくちやくちやにする音を使用。

ビニール袋で音をはっきりできるようにした。

このように音・演奏を工夫・改善することで、子どもたちが「次何が出てくるんだろう」とドキドキするような演奏を取り入れたり、音をはっきりと聞こえるようにすることで子どもたちが今何をしているのかを理解できるようにした。

#### ④カメラ配置・動きについて

カメラ配置・動きについて2つの項目に分け、写真を用いながら報告する。

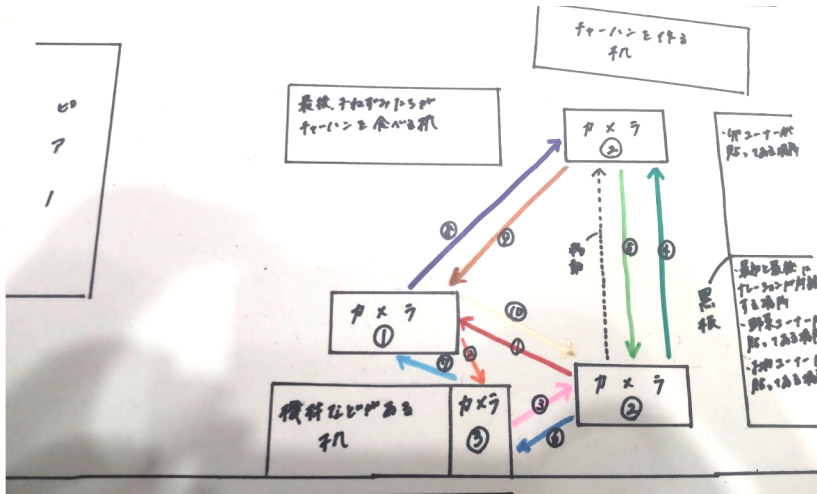


写真1「当初の計画」

当初の計画では上の写真1のような配置・動きを計画していた。しかし練習で小道具の配置場所やカメラの切り替えなどを日々取り組んでいくなかで、写真1の配置・動きではカメラに繋がっている線を踏んでしまったり、スムーズに物語が進まなくなってしまい、やりにくさを感じた。そのため、当初の計画から下の写真2のように工夫・改善した。

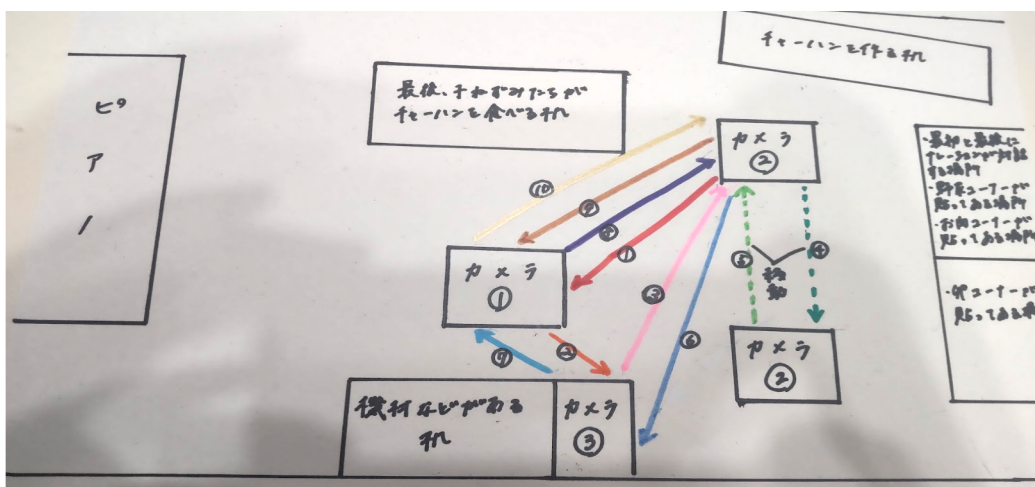


写真2「工夫・改善したカメラ配置・動き」

上の写真2はカメラ配置・動きを工夫・改善したものだ。また次のページにある写真3は、実際に取り組んでいる様子を撮影したものである。





写真3「実際に取り組んでいる様子」

このように工夫・改善することで、様々な問題が解決され、演者が作業をスムーズに行うことができた。

(平田凜)

## (7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

### (1) ねずみの耳を付ける

子どもたちはねずみの耳を受け取って被ると、「チュウチュウ」と言い、鳴き真似をしていた。ねずみの耳を付けたことで、ねずみはどのように鳴いたり、動いたりするのかを想像しながら、ねずみになりきる事が出来たのではないかと思う。

### (2) 買い物に行く

買い物に出かける絵の場面で、子どもたちはピアノの音楽に合わせて、ノリノリで身体を動かしていた。またスーパーに向かっている絵だけでなく音楽を付けたことで、子どもたちはどんなお店なのか、何を買わないと行けないのかなど想像しながら、リズムに合わせて身体を動かし、ワクワク感を味わうことが出来たのではないかと思う。

野菜を買う場面では、子ねずみが「野菜コーナーはどこだろう?」、「何を買うんだったっけ?」、「これで合ってる?」などと声を掛けると、子どもたちは「違う違う! 緑色のやつ!」などと色や形で教えたり、手で○か×を大きく表現して一生懸命教えていた。子どもたちは「あれ」、「それ」などの言葉では伝わらないことに気づき、分かりやすく伝えるために色や形で表現したり、視覚的に分かりやすいように手で丸バツを表現していたのだと思う。この場面で、子どもたちはどのように表現したら、画面の向こうにいるねずみたちに伝わるのかを一生懸命考えながら、表現することが出来たのではないかと思う。

卵を買う場面では、怖い音のする大きな卵をみて「こわい」と言いながら先生の後ろに隠れたり耳を塞ぐ様子が見られた。また、可愛い音のする小さい卵を見ると「可愛くてよかった」と安心している様子だった。

恐竜の卵が割れる時に音をつけたことで、目で見た物だけでなく音でも「怖い」や「かわいい」と想像することが出来たのではないかと思った。

### (3)チャーハン作り

野菜やベーコンを切る場面では、好きな材料の折り紙を選んで手本を見ながら丁寧に細かくちぎっていた。オーケストラ・ウッドブロックのリズムが早くなるとちぎるのを早く終わらせようと急いだり、音が止まるとちぎるのをやめて、用意していたボールの中に入れて様子が見られた。手本を見せるだけでなく、音を付けて終わりが近づくにつれてリズムを早くしたり、最後の終わりの合図を表現するためにリズムを変えたりした事で、子どもたちがちぎる作業が終わることを理解することが出来たのだと思う。

火をつける場面では、ネズミから「みんな火になって！」と言うと、子どもたちはネズミや保育者の動きを見ながら、様々な動きをして火になりきっていた。初めはどのように動いたらいいのか、分からずに戸惑っていたが、周りの友達や保育者の動きを見ながら、火を強くするために、どのような動きをしたらいいのかを見たり、考えたりして自分なりの表現をすることが出来ていたのではないかと思う。

### (4)食べる

チャーハンを食べる場面では、ネズミたちがスプーンを貰っているのを見て、「いいな、こっちにもちょうだい！」と言っていた。その言葉を聞いて、子どもたちがみんなでチャーハンを作って食べる達成感や満足感を味わえるようにするために子どもたちの分のスプーンも準備できていたら良かったなと思った。

(富田紗衣)

## 5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

### 【小島 明日香】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもたちが楽しむことができるためには、どのような工夫が必要か考えることである。また、発想の幅を広げられるきっかけとなった。準備の過程では、3歳児の発達段階に応じてどのような呼びかけが子どもたちにとって受け取りやすいか、また、場面ごとの小道具はどのような工夫が必要かを考えながら進めた。話の構成を決める際には、伝わりやすく、楽しんでもらえることを心がけて進めた。最終的にはグループのメンバーの意見や先生方のアドバイスもあり、自分にはなかったアイデアも取り入れることができた。火の音をどのように表現するか、野菜を切り終えて次の場面にもどのように繋げていくと良いかなど、自分にはなかったアイデアであったため、自分自身の勉強にもなり、また、発想の幅を広げられるきっかけとなったと思う。本番では子どもたちの姿や反応を見ながら進めることができたと思う。子どもたちの声かけに応じて進めることができたため、対話を通して楽しむということが実践できていたのではないかと思う。これらの経験は、保育者になった際に、遊びを考える時や行事の計画を立てる時に活かしていくことができると私は思う。今回の学びをもとに、保育者になった際には子どもたちの姿を大切にしながら保育を展開していきたいと思う。

### 【平田凜】

今回幼教こども劇場を通じて、多くのことを学び、感じる事ができた。練習やリハーサルでは、カメラの配置や小道具の準備、セリフの作成など想像していたよりも時間もかかり、練習もあまり時間が取れなかったため、不安に駆られ、気が張り、緊張で心が押しつぶされそうだった。しかしプレ本番や当日の本番を迎え、実際に行ってみると、お手紙

の場面や子どもたちがねずみに変身する場面、火を起こすために子どもたちで身体表現をする場面など様々なところで盛り上がりを見せ、手ごたえを感じることができた。また子どもたちの様子を見ながら、アドリブを合間に入れ、臨機応変に対応することができ、準備期間を含め、充実した時間を過ごすことができた。特に印象的だったと感じたのは、子どもたちが火を表現する身体表現の場面で、足踏みや手振りを早くして表現するだけでなく、お遊戯室を走り回ったり、仰向けになって手足をバタバタしたり、ジャンプしたりするなど子どもたちの色々な表現がみられた。私が想像もしてなかった子どもたちの表現が次々に出てきたことがとても面白く、改めて身体表現の魅力に感じ、取り入れてよかったと感じた。

絵本の中の物語からどんな遊びが展開できるか考え、全員が意見を出し合い、こだわりを追究することによって、子どもたちの表現の幅が広がることに繋がっていくのだということ、幼教こども劇場を通して学んだ。また考えるだけでなく、実践することで自信がつき、保育士として働いていく際に間違いなく役立つ経験となった。この経験を胸に、これから出会う子どもたちにいい影響を与えられる保育者になりたいと強く感じた。

#### 【田中那歩】

今回の幼教こども劇場では、様々な学びが多く、自分にできることを常に考えて行動する大切さに気づけた。準備段階では役割を決め、それぞれが自分の仕事に責任を持って取り組み、より良いものを作り出そうと意見を出し合ったりと協力する姿が見えた。リハーサルでは本番まで時間が少ないということもあり、焦りが出てきてしまったり自分が何をしたらグループの為になるのか、子ども達が喜んでくれるような発表にするにはどのような声かけが必要かなど、自分自身、とても成長ができたと感じた。さらに本番では、多少のトラブルはあったが大きなミスはなく、私達も楽しみながら発表ができたように思う。主に、お買い物に行くシーンを担当していたが、子ども達の意見を聞いて「こっち？ え、じゃあこっち？」など、わざと間違えて子ども達が楽しく盛り上げられるような声かけができたと感じた。今回の沢山の学びや反省を活かして子どもを第一に想い、自分にできることをしっかりと考えられる素敵な保育者になりたいと思う。

#### 【穴見暖花】

幼教こども劇場を通じて、みんなで1つのものを作るときにどんな役割が必要なのか、自分の意見を伝える時にどんな風に説明したら良いのか、それぞれの意見を聞きそこからみんなが納得するものを作るためにはどうしたら良いのかを学べた。

役割決めでは、誰が何をするかを勝手に決めるのではなく、得意・不得意、希望の役割をそれぞれが発言をし、みんなで話し合いながら決めることが活動していく上で一番最初だけど責任感や役割を担うという意識に繋がる大切なことだと思った。

さらに、意見を出し合う中で自分が考えていることがなかなか伝わらなかつたり、同じ説明をしても理解する人と理解しにくい人がいたり、自分もなかなか想像がつかない場面があったりした。その時に絵で説明したり実際にやってみて説明したり、他の言葉を選んだり、臨機応変に説明することが大切だと学ぶことが出来た。これは保育の現場でも大事なことだと思うので、今回学んだたくさんを整理して保育の現場でも活用できるようにしていきたいと思った。

#### 【桑野琴巳】

ネズミさんのお買い物を通して、身体表現の大切さやリモート越しでの子供たちの反応を見ながら進めていくことの難しさに気付いた。また、マスクをしていないといけないこの時代、顔の表情が目しか見えないので声の抑揚や動きを大きくするなど工夫をしないと子供

達に伝わらないんだと改めて学んだ。特に1番印象的だったのが野菜を子供達に手でちぎってもらうシーンでリハーサルの時ちぎり終わる時間を決めずにちぎってもらっていたのでもっと細かくちぎりたい子や2枚目にいこうとしている子供達が見えて一人一人こだわりがちゃんとあることを再確認した。ちゃんと終わるタイミングを作ってあげないといけないと反省した為、本番の際は楽器で音を鳴らして終わりに近づくごとに音を速くしていき終わるタイミングが分かるように工夫をした。一人一人のこだわりを大切に終わるタイミングを決めてあげ区切りをきちんとつけることが大切なんだと学んだ。実際に本番リハーサルでの子供達の楽しそうな声や一緒に考えてくれている姿を見てすごく嬉しい気持ちになり、また保育士ってやっぱりいい仕事だなと感じた。このネズミさんのお買い物で学んだ沢山のことを活用できるようこれからも研究観察しながら頑張っていきたいと強く思った。

#### 【原田涼】

今回の内容で学んだ事が三つあった。

一つ目は、協力して1つのものを作ることの難しさである。初めは、手分けをして取り組んでいた。だが、手分けをした部分だけすると全体の流れが分からず、すれ違いなどが起きていたため、途中から自分の役割以外のところも一緒に準備したり、一緒に提案して一つのものを作り上げた。その中で保育では効率を重視するよりも流れを意識した準備が大切なんだと学ぶ事ができた。

二つ目は、声かけの配慮である。私たちのチームではだるまさんが転んだをするシーンがあった。しかし、劇を行った保育園ではだるまさんという手足のないものを障がいのある子どもに対して比喻してしまわないような配慮がなされていた。知らなかったとも言えるのだが、もう少し一つ一つについてしっかり調べておけば良かったと思っただけ、この事が今現場に立つ前に知れて良かったと感じることができた。ほかでも子どもたちに「こうしてみよう！」と提案したり注目して欲しい時にする声かけなども手遊びにしてみたり、視覚的に注目しやすいような工夫ができたなら良かったと反省もできた。

三つ目が子どもの成長に合わせた遊びの展開である。今回のテーマとしてごっこ遊びが1番の目標であった。お買い物ごっここというこれから保護者の方と一緒にしたり、1人ですることもある事をごっこ遊びですることによって興味を持ち、買い物の流れを楽しむ事ができるのではないかと考えていた。実際にやってみた私の視点からもどれを買わなければいけないのか等お買い物をする中であることを楽しくやって積極的にやろうとする姿が見られた。ごっこ遊びの展開として道具使いが豊富にできていたと感じることもできた。

最後に幼教こども劇場を通して学んだことを生かし、子どもたちの成長を手助けしていけるような遊びを展開していきたい。

#### 【下川ほのか】

幼教こども劇場を通して、チーム全体が活動に向けて取り組もうとすることが大事だと学んだ。チームのそれぞれが自分の任された役割を果たして、何か困ったことがあったらみんなが集まり話し合っって取り組むことができた。

コロナ禍でのリモート中継では電波問題やマスクをした中で表情を伝えていく難しさ、どれだけ自分たちの声に通っているかという不安があった。しかし子供たちの元気さに救われたと実感した。子供たちの元気さは火を表現する身体表現でも飛び跳ねる子どもや、全身を使って表現する子どもがいた。身体表現でも野菜の折り紙をちぎる作業でも一体となって子どもたちが、遊んで楽しんでいる姿を見るのが何よりも達成感があった。また、どこまで伝わっているかが分からないため動作、ジェスチャーを大きくして伝えることの大事さを学ぶことができた。

今回の幼教子ども劇場を通して周りとの協力すること、表情・ジェスチャーの大切さを学び、私たち自身が楽しんで行うからこそ子どもたちも楽しんで行えるということを実感することができた。今回の学びを経て保育現場にも活かし、様々な遊びを展開していきたい。

#### 【水谷弥晴】

今回の幼教子ども劇場を通して、子ども達の興味の引き立て方や話の展開をどのようにしたら子ども達に分かりやすく伝えることができるかなど、多くの学びを得ることが出来た。また、制作をしていくにあたって、友達と協力する大切さも学ぶことが出来た。

プレ幼教子ども劇場では、初めて子ども達の前で通してみても、上手く伝わらなかったり、場面場面での区切りが上手くいかなかったり改善部分が多く見られた。

自分たちが主に出番であった卵を買いに行く場面では、子ども達への問いかけも少なく、恐竜が出てくるシーンでも、子ども達の反応が少ないように感じた。打ち合わせではこの場面の子供達の反応は出てきた恐竜に驚き、笑顔になってくれると考えていた。しかし、実際には上手くいかず、どのようにすれば良いか考えたところ、卵が開く際にピアノで効果音をつけ、子ども達に対して「まって！なにが聞こえない??」と問いかけを行うとより反応が出ると考えた。

このように、本番に向けて反省から何度も打ち合わせをし直したり、小道具の改善をしたりした。

実際に本番を迎えてみて、沢山の改善をしたことから、子ども達の反応も良く、楽しんで劇場を見てくれたように感じた。卵の場面も「何聞こえない？」という声掛けに対して子ども達は「なにが聞こえる!!」と、とてもワクワクした様子で答えてくれ、ピアノの効果音には少しドキドキしているように見えた。卵が割れる時、出てきた恐竜に子ども達目をキラキラさせながら驚いていてとても笑顔になっていた。この時の子ども達の反応を見て、何度も思考錯誤をしてきて良かったと思った。

今回の幼教子ども劇場で得られた経験を今後の保育の現場でも役立てていきたい。本番まではとても大変だったが、有意義な時間になった。

#### 【富田紗衣】

今回の幼教子ども劇場を通じての1番の学びは、子どもたちが画面越しでも絵本の世界に入り込んで楽しめるようにするために、どのような表現や工夫が必要なのかを考えることだと思う。

準備の段階では子どもたちが絵本の世界により入り込むことができるようにするために、一人ひとりが自分の役割の部分だけでなく全体で意見を交換しながら日を重ねるに連れて多くの工夫を加えることが出来た。

準備に力を入れすぎてあまり練習をすることが出来ずにプレを迎えることになってしまったが、子どもの反応を見ながら臨機応変に対応することが出来、子どもたちを楽しめることが出来たと思う。

プレを終えて先生方からのアドバイスを受けながら、改善点から工夫を重ねて子どもたちがどう楽しめるのかを考え、自分たちも楽しみながら劇場を成功させたいという気持ちで頑張った。本番では子どもたちが質問に対して受け答えしてくれたり、一緒にチャーハンを作る動作をしてくれたりと楽しんでいる様子が見られた。子どもたちとリモートで関わることはもうないと思うので機材トラブルなどありましたが良い経験となった。